

唄立山心中一曲

泉鏡花

青空文庫

「ちらちらちら雪の降る中へ、松明たいまつがぱつと燃えながら二本——誰も言うことでもございしますが、他ほかにいたし方もありませんや。真白まっしろな手が二つ、悚然ぞつとするほどの婦おんなが二人……もうやがてそこら一面に薄うつつり白くなつた上を、静しずかに通つて行くのでございませす。正体は知れていても、何しろそれに、所が山奥でございしよう。どうもね、余り美しくつて物凄ものすごうございました。」

と鑄掛屋いかけやが私たちに話した。

いきなり鑄掛屋が話したでは、ちと唐突だしぬけに過ぎる。知己ちかづきに

なつてこの話を聞いた場所と、そのいきさつをちよつと申陳べ
 る。けれども、肝心な雪女郎と山姫が長襦袢ながじゆばんであらわ顯れたようなお
 話で、少くとも御覽の方はさきをお急ぎ下さるであらうと思う、
 で、簡単にその次第を申上げる。

所は信州姨おばすて捨の薄暗い饅飩屋うどんやの二階であつた。——饅飩屋さ
 え、のつけに薄暗いと申出るほどであるから、夜の山の暗い事思
 うべしで。……その癖、可笑おかしいのは、私たちは月を見ると言つて
 出掛けたのである。

別に迷惑を掛けるような筋ではないから、本名で言つても差支
 えはなからう。その時の連つれは小村雪岱こむらせったいさんで、双方あちらこち
 らの都合上、日取が思う壺つぼにはならないで、十一月の上旬、潤うるう

年の順どしにおくれた十三夜の、それも四日ばかり過ぎた日の事であつた。

——居待月である。

一杯飲んでゐる内には、木賊刈とくさるといふ歌のまま、研みがかれ出いづる秋の夜よの月となるであらうと、その気で篠しのノ井で汽車を乗替えた。が、日の短い頃であるから、五時そこそこというのにもうとつぷりと日が暮れて、間は稲荷山いなりやまただ一丁場ひとちようばだけでも、線路が上りで、進行が緩い処へ、乗客が急に少く、二人三人と数えるばかり、大おおきな木の葉がぱらりと落ちたようであるから、搔合かきあわす外がいとう套そでの袖も、妙にばさばさと音がする。外は霜であろう。山の深さも身に沁しみる。夜よさえそぞろに更け行くように思われた。

「来ましたよ。」

「二人きりですね。」

と私は言った。

名にし負う月の名所である。ここのステーション停車場を、月の劇場の木

戸口ぐらいな心得違のぼりいをしていた私たちは、まんどう幟や万燈には及ば

ずとも、屋号をかいゆみはりちようちんいた弓張提灯で、へい、茗荷屋みようがやでござい

ます、旅店の案内者ぐらいは出ていようと思つたの大きな見当違ちがい。

絵に描かいた木曾のかけはし栈橋を想わせる、断崖がけの丸木橋のようなプラ

ツトフォームへ、しかも下りたのはただ二人で、改札口へ渡るベ

き橋もない。

一人がバスケットと、一人が一升びん壺を下げて、月はなけれど敷

板の霜に寒い影を映しながら、あちらへ行き、こちらへ戻り、で、小村さんが唇をちよつと曲げて、

「汽車が出ないと向うへは渡られませんかよ。」

「成程。線路を突切つて行く仕掛けなんです。」

やがてむらむらと立昇る白い煙が、妙に透通つて、颯と屋根へ掛る中を、汽車は音もしないように静に動き出す、と漆のごとき真暗な谷底へ、轟と迸する……

「行つていらつしやいまし……お静に——」

と私はつい、目の前をすれすれに行く、冷たそうに曇つた汽車の窓の灯に挨拶した。ここへ二人きり置いて行かれるのが、山へ棄てられるような気がして心細かつたからである。

壇はあるが、深いから、首ばかり並んで霧の裡なかなる線路を渡つた。

「ちよつと、伺いますが。」

「はあ？」

手ランプを提げた、真まっくろ黒な扮装いでたちの、年の少わかい改札掛がかりわすかに一人いちにんに。

待合所の腰掛の隅には、頭から毛布けつとを被かぶつたのが、それもただ一人居る。……これが伊勢だと、あすこを狙ねらつて吹矢を一本——と何も不平を言うのではない、旅の秋を覚えたので。——小村さんは一旦外へ出たが、出ると、すぐ、横の崖いわか巖いわを滴る、ひたひたと清水の音に、用心のため引返して、駅員に訊いたのであつた。

「その辺に旅籠屋はたごやはありましようか。」

「はあ、別に旅籠屋と言つて、何ですな、これから下へ十四五町、……約半道はんみちばかり行きますと、湯の立つ家があるですよ。外ほかは大概一週間に一度ぐらいなものですからなあ。」

「あの風呂を沸かしますのが。」

「さよう。」

「難ありがと有う——少しどうも驚きました。とにかく、そこいらまで歩いてみましょう。」

と小村さんが暗がりの中を探りながら先へ立つて、

「いきなり、風呂を沸かす宿屋が半道と来たんでは、一口飲ませる処とも聞きにくうございますよ。しかし何かしらありましよう

……何なんしろ暗い。」

と構内の柵について……灯ともの百合しびが咲く、大おおな峰、広ひろい谷に、はらはらとある灯ひをたよりに、ものの十間けんとは進まないで、口を開けて足を嚙かむ狼おおかみのような巖いわの径こみちに行悩んだ。

「どうです、いつそこへ蹲しゃがんで、壘びんづめ詰めの口を開けようじゃありませんか。」

「まさか。」

と小村さんは苦笑して、

「姨捨山たご、田毎とごの月ともあろうものが、こんな路みちで澄すみましているって法はありません。きつと方角を取違えたんでしよう。お待ちなさいまし、逆に停車場ステーションの裏の方へ戻ってみましょう。いくら

か燈あかりが見えるようです。」

双方黒い外套が、こんがらかつて引返すと、停車場ステーションには早や
 駅員の影も見えぬ。毛布けつとかぶりの瘦やせた達磨だるまの目ばかりが晃きらきら々
 と光つて、今度はどうやら羅漢に見える。

と停車場ステーションの後うしろは、突いきなり然荒寺の裏へ入った形で、芬ぶんと身に沁し
 みる木この葉はの匂におい、鳥の羽で撫なでられるように、さらさらと——袖
 が鳴つた。

落葉を透かして、山やまふところ懐なごころの小高い処ところに、まだ戸を鎖ささない灯あかり
 が見えた。

小村さんが、まばらな竹の木戸を、手を拵たてげつつ探り当てて、
 「きつと飲ませますよ、この戸の工合ぐあいが気に入りました」

と勢いきおいよく、一足先に上つたが、程もあらせず、ざわざわざわと、落葉を鳴らして落来るばかりに引返して、

「退却……」

「え、安達あだちヶ原ですか。」

と聞く方が慌てている。

「いいえ爺さんですがね、一人土間で草鞋わらじを造っていましたね。

何だ、誰じやいッて喚わめくんです。」

「いや、それは恐縮々々。」

「まことに済みません。発起人がこの様子で。」

「飛んでもない。こういう時は花道を歌で引込ひっこむんです、柄にはありませんがね。何でしたっけ、……

わが心なぐさめかねつ 更科さらしなや

姨捨山に照る月をみて

照る月をみて慰めかねつですもの、暗いから慰められて可いいわ
 けです。いよいよ路が分らなければ、停ステーション車場で、次の汽車を待
 って、松本まで参りましょう。時間がありますからそこは氣丈夫
 です。」

しかるところ、暗くらがりがりに目めが馴なれたのか、空は星の上に星かさなが重
 つて、底そこひなく晴はれている——どこの峰たかねにも銀の覆ふくりん輪りんはかからぬ
 が、自おのずから月の出の光が山やまの膚はだを透とおすかして、巖いわの欠かけめも、路みちの
 石いしも、褐かばいろ色いろに薄あく蒼あお味みを潮しほして、はじめ志こころした方かたへ幽かすかながら見
 えて来た。灯あかり前さきの木の葉は白く、陰かげなる朱もみじ葉はの色いろも浸にじむ。

かくして辿りついた薄暗い饅飴屋であつた。

何しろ薄暗い。……赤黒くどんより煤けた腰障子の、それも宵

ながら朦朧と閉つていて、よろず荒もの、うどんあり、と記し

た大な字が、軒をかいいていそうに見えた。

この店の女房が、東京ものは清潔すぎだからと、氣を利かして、

正札のついた真新しい湯沸を達引いてくれた心意氣に対しても、

言われた義理ではないのだけれど。

「これは少々酷過ぎますね。」

「ここまで来れば、あと一辛抱で、もうちとどうにかしたのがあ

りましょう。」

実は、この段、囁き合つて、ちようどそこが三岐の、一方は

裏山へ上る山やま岨その落葉こみちの径みち。一方は崖を下る石ころ坂の急なやつ。で、その下りる方へ半町ばかりまた足探り試みたのであるが、がけの陰になって、暗さは暗し、路は悪し、灯ひは遠し、思切つて逆戻りにその饅頭屋を音訪おとずれたのであつた。

「御免なさい。」

と小村さんが優しいおだやか穏な声を掛けて、がたがたと入つたが、向うの対手あいてより土間の足許あしもとを俯向うつむいて視みつつ、横にとぼとぼと歩行あるいた。

灯が一つ、ぼうと赤く、宙に浮いたきりで何も分らぬ。釣つりランプだが、火屋ほやも笠も、煤すすと一所に油煙で黒くなって正体が分らないのであつた。

が凝視^{みつ}める瞳で、やっと少しずつ、四辺^{あたり}の黒白^{あいろ}が分つた時、私はフト思いがけない珍らしいものを視^みた。

二

かまち
 框の柱、天秤^{てんびん}棒^{ぼう}を立掛けて、なべかま
 鍋釜^{なべかま}の鑄掛^{いかけ}の荷が置いてある
 ——亭主が担ぐか、場合に依つてはこうした徒^{てあい}の小宿^{こやど}でもするか、
 鑄掛屋の居るに不思議はない。が、珍らしいと思つたのは、薄汚
 れた鬱金^{うこん}木綿^{もめん}の袋に包んで、その荷に一挺^{ちよう}、紛^{まが}うべくもない、三
 味線^{ゆわ}を結え添えた事である。

話に聞いた——谷を深く、麓^{ふもと}を狭く、山の奥へ入つた村里を廻

る遍路のような渠等かれらには、小唄浄瑠璃じようるりに心得のあるのが少くない。行く先々の庄屋のもの置おき、村はずれの辻堂などを仮すまいの住居として、昼は村の註文を集めて仕事をする、傍ら夜は村里の人々に時々の流行唄はやりうた、浪花節なにわぶしなども唄って聞かせる。聞く方では、祝儀のかわりに、なくても我慢の出来る、片手とれた鍋の鑄掛も誂あつらえるといった寸法。小児こどもに飴菓子あめがしを売って一手踊ひとてつたり、唄つたり、と同じ格で、ものは違つても家業の愛想——盛場さかりばの吉原にさえ、茶屋小屋のおかつぱおたばこぼん 盆ぼんに飴を売つて、爺じじやあつち、婆ばばやこつち、おんじやらこつちりこ、ぱあばあと、鳴物入で鯛たことおかめの小人形を踊らせた、おん爺じいがあつたとか。同じ格だが、中には凄すげいような巧うまいのがあるという。

唄いながら、草や木の種子たねを諸国に撒まく。……怪しい鳥のよう
なものだと、その三味線が、ひとりで鳴くように熟じつと視みた。

「相談は整ととのいました。」

「それは難ありがた有いい。」

「きあ、二階へどうぞ……何なんしろ汚ないんでございますよ。」

と、雨もりのような形が動くとき、紺あざの上うわ被わを着おんた婦んなになつ
て、ガチリと釣つランプを捻ひねつて離はなして、框かまちから直ちぐの階はしご子だん段だん。

小村さんが小さな声で、

「何なんしろこの体ていなんですから。」

「結構ですとも、行暮ゆれました旅りの修しゆ行ぎやう者しやになりましようね。」

「では、そのおつもりで——さあ、上ありましよう。」

と勢いきおいよく、下駄を踏違えるトタンに、

「あつ、」と言った。

きやんきやんきやん、クイ、キユウと息を引いて、きやんきやんきやん、クイ、クウン、きゆうと鳴く。

見事にこいぬ小狗を踏ふみつけた。小村さんは狼狽うろたえながら、穴を覗のぞくように土間を透かして、

「御免よ……御免よ……仕方がない、御免なさいよ。」

で、遁にげないばかりに階はしご子あがを上ると、続いた私も、一所にぐらぐらと揺れるのに、両手を壇の端はしにしっかり縋すがった。二階から女房が、

「お気をつけなさいましよ……お頭つむをどうぞ……お危あやうございま

すよ、お頭を。」

「何なに。」

「何なに。」
 吻ほっとしながら、小村さんは氣競きおつたように、

「踏ふ着づけられた狗から見りや、頭あたまを打ぶつけるなんぞ何でもない。」
 日頃、沈着な、謹み深いのがこれだから、余程周章あわてたに違ちがい

ない。

きやんきやんきやん、クイツ、キユウ、きやんきやんきやん、
 と断き々れに、声こゑが細こつて泣な止きまない。

「身みに沁しみますね、何なにですか、狐きつねが鳴ないでるように聞きえます。」

木地の古ふるびたのが黒くろ檀たんに見みえる、卓ちやぶ子だい台だいにさしむかつて、

小村さんは襟えりを合あせた。

くだん
件の油煙で真黒まっくろで、ぽつと灯の赤いランプの下かしこまに畏こつて、動

くたびに、ぶるぶると畳の震う処は天変あまのまへに對し、謹かしこんで、日蝕を
拝かむがごとく、少なからず肝を冷しながら、

「旅はこれだから可いいんです。何も話の種です。……話の種と言
えばね、小村さん。」

と、探らないと顔が分らぬ。

「はあ。」

「何ですか、この辺には、あわれな、寂しい、物語がありそうな
処ところですね。あの、つきのよいひなものがたり月宵鄙物語つきよひなものがたりとい
うのがあります、御存じ
でしようけれど。」

「いいえ。」

「それはね、月見の人に、木曾の麻衣あさぎぬまくり手したる坊さん、
 というのが、話をする趣向になつてゐるんですがね。（更科山さらしなやま
 の月見んとて、かしこに罷登りけるに、大なる巖いわにかたかけて、
 肘折れ造りたる堂あり。観音を据え奉れり。鏡台とか云う外山とやまに
 向いて、）……と云うんですから、今の月見堂の事でしょう。……
 ……きつとこの崖の半腹にありましようよ。……その高欄におし
 かかりながら、月を待つ間のお伽とぎにとて、その坊さんが話すので
 すが、藪原山そのはらやまの木賊刈とくさがり、伏屋里ふせやのさとの箒木ははきぎ、更科山ふるかつの老
 桂ら、千曲川ちくまがわの細石さざれいし、姨捨山うばのいしの姥石みだしなぞつて、標題ば
 かりでも、妙にあわれに、もの寂しくなるのです。皆この辺の、
 山々谷々の事なんでしょう。何なんにしろ、

信濃なる千曲の川のさゞれ石も

君しふみなば玉とひろはん

と言う場所なんですもの。——やあ、明るくなつた。」
と思わず言つた。

釣ランプが、真新しい、明あかるいのに取換つたのである。

「お待遠様、……済みません。」

「どういたしましたして、飛んだ御無理をお願い申して。」

女房は崩れた鬢びんの黒い中から、思いのほか白い顔で莞爾にっこりして、

「私どもでは難有ありがたいんでございますけれども、まあ、何しろ、お

月様がいらつしつて下さると可いんですけれども。」

その時、一列に蒲鉾形かまぼこがたに反そつた障子を左右に開けると、ラン

プの——小村さんが用心に蔓つるをおき圧えた——灯が——ひとあおり煽、山気が
颯さつと座に沁しみみた。

「一昨晚の今頃は、二かさも三かさも大い、おおき真円まんまるいお月様が、
あの正面へお出いでなさいましてございますよ。あれがね旦那、鏡きょう
台だい山ざんでございませうがね、どうも暗うございまして。」

「音に聞いた。どれ、」

と立つと、ぐらぐらとなる……

「おっと。」

欄干につかまって、かたつむり蝸牛かたつむりという身で、背を縮めながら首を

伸ばし、

「漆で塗ったようだ、ぼつと霧のかかった処は研出とぎだしだね。」

宵の明星が晃然きらりと蒼いあお。

「あの山裾やますそが、左の方へ入江のように拡がつて、ほんのり奥に灯あかりが見えるでございましょう。善光寺平ぜんこうじだいらでございましてね。

灯のありますのは、善光寺の町なんでございませよ。」

「何里あります。」

「八里ございます。」

「ははあ。」

「真下の谷底に、ちらちらと灯ひが見えましょう、あそこが、八幡やはたの町でございましてね、お月見の方は、あそこから、皆さんが支度をなすつて、私どもの裏の山へお上りになりますんでございませがね。鏡台山と、ちようどさし向いになっております——おお、

冷えますこと、……唯ただいま今お火鉢を。」

「小村さん、寸法は分りました、どうなすつたんです、景色も見
ないで。」

と座に戻ると、小村さんは真顔で膝ひざに手を置いて、

「いえ、その縁側に三人揃って立っただんでは、棧敷さじきが落ちそう
危険けんのんですから。」

「まったく、これで猿樂があると、……天狗が揺り倒しそうな処
です。可恐おそろしいね。」

と二人は顔を見合せた。

が、註文通り、火鉢に湯ゆわか沸が天上して来た、火も赫かッと——こ
の火鉢と湯沸が、前に言った正札つきなる真新しいのである。酒

も銚子ちようしだけを借りて、持参もつりの一升びん燗かんをするのに、女房にようばは氣き障ざだという顔かほもせず、お客みやく冥利めいりに、義理ぎりにうどんあつらを誂あつらえれば、
 乱みだれてもすなおに銀杏いちようがえし返へんの鬢びんを振ふつて、
 「およしなさいまし、むだな事ことでございます。おしたじが悪わるくつ
 て、めしあがられやしませんから。……何なんぞお香かうのものを差さ上げ
 ましょう。」

その心意こころ氣き。

「難あた有りい。」

と熱燗あつかん三杯さんぱい、手酌てしやくでたてつけた顔かほを撫なでて、

「おかみさん。」

杯さかずきをずいとさして、

「一つ申上げましょう、お知己ちかづきに……」

「私は一向に不調法ものでございまして。」

「まあ一盞ひとつ。」

「もう、全く。」

「でも、一盞ひとつぐらい、お酌をしましょう。」

と小村さんが銚子を持ったのに、左右に手を振って、すべに、しかも軋きしんで遁にげ下りる。

「何だい。」

「毒だとも思いましたかね。してみると、お互の人相が思われ
ます。おかみさん一人きりなんでしょうかしら。」

「泊りましょうか。」

「御串戯ごじょうだんを。」

クイツ、キュウ、クツク——と……うら悲かなしげに、また聞える。

「弱りました。あの狗いぬには。」

と小村さんはまた滅めい入いった。

のしのしみしり、大皿を片手に、そこへ天井を抜きそうに、ぬいと顛あらかわれたのは、色の黒い、いが栗ぐりで、しるし半纏ぼんてんの上へ汚れくさった棒縞ぼうじまの大広袖おおどてらを被はった、から脛すねの毛だらけ、図体はおおき大いが、身の緊しまった、腰のしやんとした、鼻の隆い、目の光る……年配あまりは四十余りで、稼かせぎ盛さかりの屈くつき竟ような山賊面さんぞくづら……腰にぼツ込んだ山刀の無いばかり、あの皿は何なんだ、ヘツヘツ、生首ふ二個受取たつろうか、と言いいそうな、が、そぐわないのは、頤あごに短い山や

ぎひげ
羊髯であつた。

「御免なせえ……お香のものと、媽々衆かかしゆが氣前を見せましたが、取つておきのこの奈良漬、こいつあ水ほくてちと中ちゆうでがす。菜ツ葉が食えますよ。長蕪ながかぶてツて、ここら一体の名物で、異おつに食えまさ、めしあがれ。——とところで、媽々衆のことづてですがな。

せつかく御酒を一つと申されたものを、やけな御辞退で、何だかね、南蛮なんばん秘法の麻痺しびれぐすり薬……あの、それ、何とか伝三熊こうやの膏

薬くとか言う三題噺ぼなしを逆に行つたような工合で、旦那方のお酒に毒でもありそうな様子合あいが、申訳がございません。で、居候わつしの私に、代理として一杯、いんえただ一つだけ。おしるしに頂戴してくるようにと申すんで、や、も、御覽とおりの通とおり、不躰ぶしつけながら罷出まかり

ました。実はね、媽々衆、ああ見えて、浮気もんでね、亭主は旅稼ぎで留守なり、こちらのお若い方のような、おツこちらが欲しさに、酒どころか、杯を禁たつておりますんでね。はツはツはツ。」「階子はしごの下から、伸上った声がして、

「馬鹿な事を言わねえもんだ。」

と、むきになると、まるだしの田舎なまり。

「真しんちゆうだい鍬台め。」と言った。

「……真鍬台？……」

聞くと……真鍬台、またの名を銀流しの藤助とうすけと言う、金箔きんぱくつきの鑄掛屋で、これが三味線の持ぬしであった。面つらがまえ構まへでも

知れる……このしたたかものが、やがて涙ぐんで……話したので

ある。

三

「私わッしはね、旦那。まだその時分、宿を取つちやあいなかつたんで
 ございます、居酒屋、といった処で、豆腐も駄菓子も突つッくるみに
 売っている、天井に釣つるした蕃とうがらし椒しの方が、燈ひよりは真赤まっかに目に
 立つてツた、皺しなびた店で、楣ほだ同然にの鯿にしんに、山家片鄙へんびはお極きまりの石
 斑魚わなの煮浸にびたし、衣ころもがわ川くわで噛くしばった武蔵坊弁慶の奥歯のような
 やつをせせりながら、店前みせさきで、やた一きめていた処でございま
 してね。

ちよつと私の懐中合わつしふところあいと、鑄掛屋風情のこの容体では、宿が取とりりにく悪かつたんでございますよ。というのが、焼山やげやまの下で、パツと一くべ、おへツつい様を燃もしたも同じで、山を越しちやあ、別に騒動も聞えなかつたんでございますが、五日ばかり前に、その温泉に火事がありました。ために、木賃らしい、この方に柄相当のなんぞ焼けていて、二三軒残つたのは、いずれも玄関附だからちとたじろいだ次第なんでございますが。

ええ……温泉でございませうか、名は体をあらわすとか言います、とんだ山やまなか中なかつで、……狼温泉——」

「ああ、どこか、三峰山みつみねさんの近所ですか。」

と、かつて美術学校の学生時代に、そのお山へ抜ぬけ参まいりをして、

狼よりも旅費の不足で、したたか可^こ恐^わい思いをした小村さんは、
ききおじ聞^き怯^{おじ}をして口を入れた……か噛^かむがごとく杯^{ふく}を銜^くみながら、

「あすこじやあ、お狗^{いぬさま}様と言^いわないと山番に叱^なられますよ。」

藤助は真顔で、ほろよい微^ほ醉^ろの頭^{かぶり}を掉^ふつた。

「途方もねえ、見当違^{あや}い、山また山を遙^{はるか}に離^{はな}れた、峰々、谷々：

……と言^いえばね、山の中に島々と言^いう処^{ところ}がありまさ、おかしいね。

いやもつと、深い、松本から七里も深^おくへ入^いった、飛^ひ驛^だの山中――

心細^こい処^{ところ}で……それでも小学校もありや、郵便局もありましたっ
 けが、それなんぞも焼^やけていたんでございましてね。

山坂を踏^ふ越^こえて、少々^たいな盆^ち地^ぢになつた、その温泉場へ入りま
 すと、火^ひ沙^さ汰^たはまた格^{かく}別^{べつ}、……酷^{ひど}いもので、村はずれには、落^お葉^は、

枯葉、焼灰に交つて、あとり子鳥、ほおじろ頬白、やまがら山雀、ひわ鶺鴒、こがら小雀などと
 言う、あか紅だ、青だ、黄色だわ、紫の毛も交つて、あの綺麗な小鳥
 どもが、みちばた路傍にはらはらと落ちてゐる。こいつあ、それ、時節
 が今頃になりますと、よく、この信州路、木曾街道の山家には、
 暗い軒に、糸で編んで、ぶら下げて、美しい手鞠てまりがもつ纏れたように
 売つてるやつだて。それが、お前さん、火事騒ぎに散らかつたん
 で——驚いたのは、中に交つて、おしどり鴛鴦が二羽……つがい番かね。……
 や、頂きます、ト、ト、ト、ごぜえやさ。」

と小村さんの酌を、ふた蓋するようなおきのひらな大な掌で請けながら、
 「どうもね、捨つて抱きたいようでがしたぜ。まさか、池に泳い
 だり、樹に眠つたのが、火の粉を浴びはしますめえ。売ものが散

らばりましたか、真赤まっかに染そまつた木の葉を枕で、目を眠いつていまし
たよ。

天秤棒一本で、天井へ宙ちゆうのり乗でもするように、ふらふらふら
ふら、山から山を経へめぐ歴くつて……ええちようど昨年の今月、日は、
もつと末へ寄よつておりましたが——この緋葉もみじの真最中まっさいちゆう、草も
雲も虹にじのような彩色さいしきの中なを、飽あくほど視みて通とつた私わっしもね、これに
は足あしが停とまりました。

なんと……綺麗きれいな、その翼よくの上うへも、一重敷ひとえいて、薄うつつり、白しろくな
りました。この景色けしきに舞台かが換かわつて、雪ゆきの下したから鴛鴦おしどりの精靈せいりやうが、
鬼火おにびをちらちらと燃もしながら、すつと糶せりあが上あつたようにね、お前まへ
さん……唯今ただいまの、その二人ふたりの婦おんなが、私わっしの目めに映うつりました。凄すごいよ

うに美しゆうがした。」

と鑄掛屋は、肩を軟やわらかに、胸を低うして、更あらためて私たち二人を視みたが、

「で、山路へ掛かる、狼温泉の出口を通るんでございませうが、場所はソレ件くだんの盆地だ。私わつしが飲んでいました有あり合あい御おん肴さかなというお極きまりの一膳めしの前まへなんざ、小さな原場はらつばぐらい小広うございませうのに——それでも左右へ並ならばないで、前あ後とになつて、すつと連立れんりつつて通ります。

前へ立たつたのは、蓑みのを着て、竹の子笠かぶを冠かぶつていました。……
 端折かたづまつた片褸ゆうぜんの友染わらが、藁すその裙すそに優やさしくこぼれる、稻束いなたばの根ねに嫁菜いぢようがえしが咲さいたといつた形かたち。ふつさりとした銀杏みみも返かへが耳みみ

許へばらりと乱れて、道具は少し大きゆうがすが、背がすらり
 としてゐるから、その眉毛の濃いのも、よく釣合つて、抜けるほ
 ど色が白い、ちと大柄ではありますが、いかにも体つきの嫵娜
 な婦で、

(今晚は。)

と、通掛りに、めし屋へ声を掛けて行きました。が、※と
 燃えてる松明の火で、おくれ毛へ、こう、雪の散るのが、白い、
 その頬を殺ぐようで、鮮麗に見えて、いたいたしい。

いたいたしいと言え、それがね、素足に上草履。あの、旅
 店で廊下を穿かせる赤い端緒の立ったやつで——しつとりとちと
 沈んだくらい落着いた婦なんだが、実際その、心も空になるほど

気の揉めるわけがあつて——思い掛けず降出した雪に、足駄でなし、草鞋わらじでなし、中ぶらりに右のつつかけ穿ばきで、ストンと落ちるように、旅館から、上草履で出たと見えます。……その癖、一生の晴着というので、母おつかさん譲りの裙模様、紋もんつき着なんか着ていました。

お話をしますうちに、仔細しさいは追々おわかりになります——これが何でさ、双葉屋と言つて、土地での、まず一等旅館の女中でお道さんと言う別嬪べっぴん、以前で申せば湯女ゆななんだ。

いや、湯女ゆなに見惚みとれていて、肝心の御婦人が後おくれました。もう一人の方は、山茶花さざんかと小菊の花の飛模様のコオトを着て、白地の手拭てぬぐいを吹流しの……妙な拵こしらえだと思えば……道理こそ、降りかゝ

る雪を厭いとつたも。お前さん、いま結ゆいた立てと見える高島田の水の滴た
 りそうなのに、対に照つた鼈べつこう甲の花はな笄がいは、花櫛はなぐし——この拵こしらえ
 じゃあ、白襟に相違ねえ。お化粧も濃く、紅もさしたが、なぜか
 顔の色が透き通りそうに血が澄んで、品のいいのが寂しく見えま
 す。華きやしや奢しやな事は、吹つけるほどではなくても、雪を持った向むかい
 風かぜにや、傘も洋傘こうもりも持切れませえ、被かぶりもしないで、湯女ゆな
 と同じ竹の子笠を胸へ取つて、襟を伏せて、俯うつむ向むいて行ゆきます。
 ……袖の下には、お位牌いはいを抱いだいて葬ともらい礼れいの施主せしゆに立つたようで、
 こう正しく端然しやんとした処は、視みる目に、神々しゅうございます。
 何となく容ようす子が四辺あたりを沈めて、陰気だけれど、気高いんでござい
 ますよ。

同じ人間もな……鑄掛屋を一人土間で飲あらして、納戸の炬燵こたつに潜込んだ、一ぜん飯の婆ば々か々かなどと言う徒ては、お道さんの（今晚は。）にただ、（ふわ、）と言ったきりだ。顔も出さねえ。その（ふわ、）がね、何の事アねえ、鼠の穴から古綿ちぎが千断ちぎれて出たようだ。」

「ちと耳いたが疼いたいだな。」

と饅飩屋の女房が口を入れた、——女房は鑄掛屋の話に引かれて、二階の座に加わっていたのである。

「そのかわり大まかなものだよ。店の客人が、飲あさしの二合びんと、もう一本、棚ひっさらより引ひっさら攫さらって、こいつを、井つっこへ突つっこ込んで、しばらくして、婦おんな人なたちのあとを追おってぶらりと出て行くのに、何とも

言わねえ。山は深い、旦那方のおっしゃる、それ、何とかって、山中暦日なしじゃあねえ、狼温泉なんざ、いつもお正月で、人間がめでてえね。」

「ははあ。」

「成程。」

私たちは、そんな事は徒あだに聞いて、さきを急いだ。

「荷はどうしたよ。」

と女房が笑って言った。

「ほい忘れた。いや、忘れたんじゃあねえ、一ぜん飯おきッばなに置おきッ放ばなしよ。」

「それ見たか、あんな三味線だって、壇びんづめ詰づめ二升ぐらいな値はあ

るでござんさあ、なあ、旦那方。」

「うむ、まったくな。」

と藤助は額をおさ圧えて、

「おめでてえのはこつちだっけ、はッはッはッ。」

四

「さて旦那方、洒落しやれや串じょうだん戯きじゃあねえんでございます。……

御覧の通り人間の中の変なおんな葷きのこのような、こんな野郎にも、不思議なまわり合せで、その婦おんなたちのあとを尾つけて行ゆかなけりやならねえ一役ついていたのでございましてね。……乗のり掛かった船だ。鬱う

つとう
陶しくもお聞きなせえ。」

すつとこ被^{かぶ}りで、

襟^{たた}を敲いて、

「どんつくで出ましたわ……見えがくれに行く段取だから、急ぐにや当らねえ。別^{さき}して先方は足弱だ。はてな、ここらに色鳥の小鳥の空^{うつせみ}蟬、鴛^{おしどり}鴦の亡^{なきがら}骸^{がら}と言うのが有^あつたつくと、酒^{いきおい}の勢^{せい}、雪^{ゆき}なんざ苦^{くる}にならねえが、赤^{あか}い鼻^{はな}尖^{さき}を、頬^ほ被^{かぶり}から突出^{とっしゅつ}して、へつぴり腰^{こし}で嗅^かぐ工^{くわ}合^あは、夜^よ興^{こき}引^じの爺^{じい}が穴^{あな}一のばら銭^{ぜに}を探^{たづ}なようだ。余^{あま}計^{けい}な事^{こと}でございませうがね——性^{しょう}が知^しれちやいまして、何^{なに}だか、婦^{おんな}の二人^{ふたり}の姿^{すがた}が、鴛^う鴦^うの魂^{たま}がスツと抜^ぬ出したようになりませんや。この辺^{へん}だつくと、今^{いま}度は、雪^{ゆき}まじりに鳥^{とり}の羽^はより焼^や屑^{くず}

が堆うずたかい処を見着けて、お手向たむけにね、壘びんの口からお酒をひとしづく一ひとしづく雫と
 思いましたが、待てよと私わっしあ考えた、正覚坊じゃアあるめえし、
 鴛鴦が酒を飲むやら、飲ねえやら。いつその事だと、手前の口へ
 ね、喇叭らつぱと遣やつた……こうすりや鳥の精がめしあがると同じ事だ
 と……何しろ腹ン中は鴛鴦で一杯でございました。」

女房が肥ふとつた膝で、畳に当つて、

「藤助さんよ。」

「ああ。」

「酒の話じゃあないじやあないかね、ねえ、旦那方。」

「何しろ、そこで。」

と、促せば、

「と二人はもう雑木林の崖に添つて、上りを山路やまみちに懸かかつています。白い中を、ふつふつと、真紅まつかな鳥のたつように、向うへ行く。……一軒、家だか、穴だか知れねえ、えた、非人の住んでいそうな、引傾ひっかしいだ小屋に、筵むしろを二枚ぶら下げて、こいつが戸になる……横の羽目に、半分ちぎれた浪花節なになぶしの比羅びらがめらめらと動いているのがありました、それが宿しゆくはずれで、もう山になります。峠を越すまで、当分のうち家らしいものはございませんや。

水の音が聞えます。ちよろちよろ水が、青いように冷く走る。山清水こながれの小流のへりについてあとを慕いながら、いい程合で、透かして見ると、坂も大分急いしころみちになった石碓道いしころみちで、誰がどつちのを解いたか、扱帯しごきをな、一条ひとすじ、湯女ゆなの手から後うしろに取つて、それ

をその少い貴婦人てつた高島田のが、片手に控えて縋すがつています
 ……もう笠は外して脊へ掛けて……絞しぼりの紅あかいのがね、松明たいまつが揺
 れる度に、雪に薄紫さつに颯さと冴さえながら、螺旋らせんの道条みちすじにこう畝うね
 と、そのたびに、崖もみじの緋葉もみじがちらちらと映りました、夢のようだ。
 視みる奴やつの方が夢のようだから、御当人たちは現うつつかも知れねえ。
 でその二人は、そうやって、雪の夜道を山坂かけて、どこへ行
 くんだと思おぼしめ召しめす。

ここだて——旦那。」

藤助は息継いきつぎに呷ぐいと煽あおつて、

「この二階から、鏡台山を——（少し薄明さりが映さしますぜ、月が
 出でましよう。まあ、御緩ごゆるりなさいまし、）——それ、こうやって

視るみるように、狼温泉の宿はずれの坂から横正面といった、肩でこ
 う捻ねじむ向むいて高く上を視る処に、耳はねえが、あのランプのハア
 ト形かしろに頭おったを押立ふくろつた梟たけケ嶽、梟、梟と一口となに称なえて、何嶽しゅもくづえと
 いうほどじゃねえ、丘が一座ひとつくら、その頂てっぺん辺へに、天狗の撞しゅもくづえ木杖しゅもくづえとい
 った形に見える、柱が一本。……風の吹まわしで、松明さきの尖さきがぼ
 っと伸びると、白くなってあらわ顕あらわれる時は、耶蘇ヤソの看板の十字架あざなてつ
 たやつにも似ている……こりや、もし、電信柱で。

蔭かげに隠れて見えねえけれど、そこに一ひとつはり張テント天幕テントがあります。何
 だと言うと、火事で焼けたがために、仮かごしらえの電信局で、温
 泉場から、そこへ出張でばつているのでございます。

そこへ行くんだね、おんな婦二人は。

で、その郵便局の天幕の裡うちに、この湯女ゆなの別嬪べっぴんが、生命いのちがけ
 二年越ごしに思い詰めている技手の先生……ともう一人は、上州高崎
 の大資産家おおかねもちの若旦那で、この高島田のお嬢さんの婿さんと、その
 二人が、いわれあつて、二人を待つて、対の手戟てぼこの石突いしづきをつか
 ないばかり、洋服を着た、毘沙門天びしゃもんてん、増長天ぞうちょうてんという形で、
 五体を緊しめて、殺気いきを含んで、呼吸いきを詰めて、待構まちかまえているんで
 がしてな。

お嬢さんの方は、名を縫子さんと言うんで、申さずとも娘ツ子
 じゃありません、こりや御新姐ごしんぞ……じゃあねえね——若奥様。」

峰の白雪、麓ふもとの氷、

今は互に隔てていれど、

やがて嬉しく、溶けて流れて、

合うのじゃわいな。……

「わっし私は日暮前に、その天幕張テントばりの郵便局の前を通つて来たんでご

ざいますよ。……ちようど狼の温泉へ入いりこ込みます途中でな。……

晩に雪が来ようなどとは思ひも着かねえ、小春日こはるびより和といった、ぼ

かほかした好いい天気。……

もつとも、甲州から木曾街道、信州路を掛けちやあ、麓ふもとの岐えだみ

路ちを、天秤てんびんで、てくてくて、路みちばた傍の木の葉がね、あれ性しょうの、

いい女の、ぼうとなつて少し唇の乾いたという容子ようすで、へりを白くして、日向ひなたにほかほかかかして、草も乾燥はしやいで、足のうらが擦くすくつてえ、といった陽気やうきでいながら、槍やり、穂高ほたか、大天井おほてんじやう、やけに焼やけケ嶽けつなどという、大薩摩おおざつまでももの凄すごいのが、雲の上に重かさなつて、天に、大波おほなみを立てている、……裏の峰うらのみねが、たちまち颯さつと暗くくなつて、雲が被かぶつたと思うと、箕みで煽あおるように前の峰まへのみねへ畝うねりを立ててあびせ掛かけると、浴ゆびせておいて晴はれると思おもえば、その裏の峰うらのみねがもう晴はれた処ところから、ひだを取とつて白しろくなります。見る見るうちに雪ゆきが掛かるかんでございましてね。左右さゆうの山やまは、紅べにくなつたり、黄色きいろかつたり、酔よつたり、醒さめたりして、移うつつて来るそのむら雲くもを待まちつてゐる。

といつた次第で、雪の神様が、黒雲の中を、おおき 大な袖を開いて、
 虚空を飛ひぎよう行なさる姿が、遠くのその日向の路に、ぼった 蝨斯ほどの小
 さな旅のものに、ありありと拝まれます。

だから、日向で汗ばむくらいだと言つた処で、雑樹一株隔てた
 中には、草の枯れたのに、日が映さすかと思れば、何、るりいろ 瑠璃色に小
 さく凝こつた竜胆りんどうが、日中ひなかも冷たい白い霜を噛かんでいます。

が、陽の赤い、その時梟ヶ嶽は、猫が日向ぼっこをしたような
 形で、例の、草鞋わらじも脚絆きやはんも擦くすくつてえ。……満山うちのもみじの中に、
 もくりと一つ、道も白く乾いて、枯草がほかほかする。……かんば 芳し
 い落葉の香のする日の影を、まともに吸つて、くしやみが出そう
 なのを獅噛しかみづら面めんで、

(鑄掛……錠前の直し。)

すくツと立った電信柱に添って、片枝折れた松が一株、崖へのしかかつて立っています、天幕張だろうが、掘立小屋だろうが、人さえ住んでいれば家業冥利……

(鑄掛……錠前直し。) ……

と、天幕とその松のあります、ちよつと小高くなつた築山つぎやまでつた下を……温泉場の屋根を黒く小さく下に見て、通りがかりに、じろり……」

藤助は、ぎよろりとしながら、頬ほっぺた辺を平手でたた敲いて、

「この人相だ、お前さん、じろりとよりか言いようはねえてね、ト行やった時、はじめて見たのが湯女のその別嬪だ。お道さんは、

半襟の掛った縞の着ものに、まえだれがけ前垂掛、昼夜帯、若い世話女房と
 いった形で、その髪の毛のいい、あかぬけ垢抜のした白い顔を、神妙にうつむ俯向
 いて、そまつ麁末な椅子に掛けて、テーブル卓子によりかか凭掛けて、足袋を繕つて
 いましたよ、紺足袋を……

(鑄掛……錠前の直し。)……

ちよつと顔を上げて見ましたつけ。すぐ直に、じつと足袋を刺すだ
 て。

動いただけになおいき活きて、つや光沢を持った、きめのこまか細な襟脚の好
 さなんと言つちやねえ。……通り切れるもんじやあねえてね、お
 前さん、雲だか、風だか、ふらふらと野道山道宿なしの身のほま
 ちだ。

ひとこと
一言ぐらい口を利いて、渋茶の一杯も、あのお手からと思

ましたがね、ぎよつとしたのは半分焦げたなりで天幕の端に真まっす直ぐに立たつた看板だ。電信局としてある……

茶屋小屋、出茶屋の姉ねえさんじゃあねえ。風俗なりふりはこの目たしかで確たに
睨にらんだが……おやおや、お役人の奥様かい。……郵便局員の御夫
人かな。

これが旦那方だと仔細しさいねえ。湯茶の無心も雑作はねえ。西行法
師なら歌をよみかける処だが、山家めぐりの鑄掛屋じゃあ道を聞
くのも跋ぼつが変だ。

ところで、椅子はまだ二三脚、何だか、こちとらにや分らねえ
が、ぴかぴか機械を据附けた卓テエブル子がもう一台。向むかつてきちんと

椅子が置いてあるが、役人らしいのは影も見えねえ。

ははあ、来る道で、向の小山の土手腹むこうに伝わった、電信の鋼は

線りがねの下あたりを、木の葉の中に現れて、茶色の洋服で棒のよう

なものを持って、毛虫が動くように小さく歩行あるしている形を視みた。

……鉄砲打の鳥おどしかと思つたが、大きにそんなのが局員の先生で、この姉さんの旦那かも知れねえよ。

が何しろ留守だ。

(鑄掛……錠前直し。) ……

と崖ぶちの日向ひなたに立つたが、紺足袋の繕い。……雪の襟脚、白

い手だ。悚然ぞつとするほど身に沁みてなりませんや。

遥はるかに見える高山の、かげつて桔梗色ききよういろしたのが、すつと雪を被かつ

いでいるにつけても。で、そこへまず荷をおろしました。

(や、えいとこさ。)と、草鞋わらじの裏が空へかえ翻るまで、山端やまばたへどつしりと、暖かい木の葉に腰を落した。

間拍子もきっかけも渡らねえから、ソレ向うの嶽たけの雪を視みながら、

(ああ、降つたる雪かな。)

とか何とか、うろ覚えの独ひとりごと言を言つてね、お前さん、

(それ、雪は鵝毛がもうに似て飛んで散乱し、人は鶴かくしやうを着て立つて徘徊はいかいすと言えり……か。)

なんのツて、ひらひらと来る紅べにいろ色の葉から、すぐに吸いつけるように煙草たばこを吹かした。が、何分にも鑄掛屋おさまじゃあ納りません

な。

ところでさて、首に巻いた手拭てぬぐいを取って、払はたいて、馬士まごにも
 衣い裳しようだ、芳原かぶりと気取りましたさ。古三味線を、チンとか
 ツンとか引搔ひっかきな鳴らして、ここで、内証で唄ったやつでさ。

峰の白雪、麓の氷——

旦那、顔を見つこなし……極きまりが悪い……何と、もし、これで別
 嬪の姉さんを引寄せようという腹だ、おかしな腹だ、狸たぬきの腹だね。
 だが、こいつあちとら徒であいの、すなわち狸の腹鼓という甘術あまてで
 ね。不気味でも、気障きざでも、何でも、聞く耳を立てるうちに、う
 かうかと釣出されずにやいねえんだね。どうですえ、……それ、
 来ました。」

と不意に振向く、階はしご子段の暗い穴。

小村さんも私も慄然ぞつとした。

女房はなおの事……

「あれ、吃驚びっくりした。」

と膝で摺寄すりよる。

藤助は一笑して、

「まずは、この寸法でございましてね、お道さんを引寄せた工合
というのが、あはッはッ。」

「見ない振ふり、知らない振、雪の遠山とおやまに向いて、……溶けて流れてと、唄うしろつていながら、後方へ来るのが自然と分るね、鹿の寄るのとは違います。……別嬪かおりの香がほんのりで、縹きりよう織あらいに打たれて身に沁む工合が、温泉の女神おんながみさま様が世話に碎けてあらわ顛あれたようでございましたぜ。……（逢いたさに見たさ）何とか唄やつて、チヤンと句切ると、

（あの、鑄掛屋さん。）

と、初音はつねだね。……

視みると、朱塗の盆に、吸子きびしよ、茶碗を添えて持っている。黒くろじ縹ゆす子の引掛帯ひっかけおびで、浅葱あさぎの襟のその様子が何とも言えねえ。いえ、もう一つ、盆の上に、紙に包んだ蝶々というのが載のつて

いました。……それがために讃めるんじやあねえけれど、拵えねえで、なまめいたもんでしたぜ。人を喰ったこつちの芳原かぶりなんざ、もの欲しそうで極きまりが悪くなつたくらいで。

（へい、へい、へい、こりや奥様、恐入りました。）

とわざとらしくも、茶碗をな、両手で頂かずにやいられなかつた。

姉ねえさんが、初々しい、しおらしい事を、お聞きなせえ、ぼうツとなつて、

（まあ、あんな事、私は奉公人なんですよ。）

さ、その奉公人風情が、生意気のようだけれど、唄をもう一つ唄って聞かしてもらえまいか、と言うんじやありませんかい。お

眺あつらえが注文にはまった。こんな処でよろしければ、山で樹の数、幾つだつて構やあしませんと、……今度は（浮世はなれて奥山ずまい、恋もりん気も忘れていたが、）……で御機嫌を取結ぶと、それよりか、やっぱり、先せんの（やがて嬉しく溶けて流れて合うのじやわいな）の方を聞かして欲しいと、山姫様、御意遊ばす。」

藤助は杯でちよつと句切つて、眉も口も引ひきしま緊つた。

「旦那方の前でございますがね、こう中腰に、しめかげん加減の好い帯腰で、下に居て、白い細い指の先を、染めた草につくようにして熟じつと聞く。……聞手が、聞手だ。唄う方も身につまされて、これでもお前さん、人間交づきええ際もすりや、女出入でいりも知らねえじゃあねえ。少わかい時を思い出して、何となく、我身ながら引入れられて、

……覚えて、ついぞねえ、一生に一度だ。較くらべものにやあなりませんが、むかし琵琶びわほうし法師の名誉なのが、こんな処で草枕、山の神様に一曲奏でた心持。

と姉さんがとけて流れて合うのじゃわいななど、きき入りながら、睫毛まつげを長くうつむいて、ほろりとした時、こつらも思わず、つい、ほろり……いえさ、この面つらだからポタリと出ました。」

と口では言いつつ声が湿った。

「(つかん事を聞きますけれど、鑄掛屋さん、錠あいかぎの合鍵あいかぎを頼まれて下さいますか。)……と姉さんがね。

私わっしあこれを聞いて、ポンと両手を拍うった。

このくらいつく事は、私の唄が三味線につくようなもんじゃあ

ねえ。

(鍵が狂ったんでございますかい。)

(いいえ、無いんですけれど。)

(雑作はがあせん、煙草三服飲む間だ。)

そこで錠前を見て、という事になると、ちと内証事らしい。：

：しとやかな姉さんが、急に何だか、そわついて、あつちこつち
 みまわ

しましたが、高い処にあぶなにこう立つと、風が攫さらつて、すつと、雲の
 上へ持つて行きゆきそうにあぶなで危あぶなツかしいように見えます。

勿論人影は、ぽツつりともない。

が、それでも、天幕テントの正面からじゃあ、気咎きとがめがしたと見えて、

(済みませんが、こつちから。)

裏へ廻ると、ほころ綻びた処があるので。……姉さんは科しなよく消えたが、こっちは自雷じらいや也の妖術にアリヤアリヤだね。列子せこという身はいこで這込みました。が、それどころじゃあねえ。この錠前だと言うのを一見に及ぶと、片隅に立掛けた奴だが、大蝦蟆おおがまの干物とも、かば河馬の木乃伊みいらとも譬たとえようのねえ、皴しなびて突張つっぱって、兀はげ斑まだらの、大古物の大でつかい革鞄かばんで。

こいつを、古新聞で包んで、薄汚れた兵児帯へこおびでぐるぐると巻いてあるんだが、結びめは、はずれて緩んで、新聞もばさりと裂けた。そこからそれ、煤すすを噴すきそうな面つらを出して、蘆あしの茎ずいから谷のぞ覗くと、鍵の穴を真ま黒くろに窪まましているじゃアありませんか。

(何が入っておりますえ。)

失礼な……人様の革鞆を……だが、私わっしあついで、うっかり言った。

(あの、旦那さんのお大事なものばかり。)

(へい、あなた貴女の旦那様の?)

(いいえ、技師の先生の方ですが、その方のお大事なものが残らず、お国でおかれになりました奥様のお骨こつも、たったお一人ツ子の、かけがえのない坊ちやまのお骨も、この中に入っていないらつしやるんですって。)

と、こう言うんですね。」

小村さんと私は、黙って気を引いて瞳を合した。

藤助は一息ついて、

「それを聞いて、安心をしたくらいだ。技師の旦那の奥様と坊ち

やまのお骨と聞いて、安心したも、おかしなものでございませうがね、一軒家の化葛籠ばけつづらだ、天幕の中の大革鞄じゃあ、中うちに何が入ってるか薄気味が悪かったんで。

（へい、その鍵をおなくしなすった……そいつはお困りで、）

と錠前の寸法を当りながら、こう見ますとね、新聞のまだ残った処ところに、青錆あおさびにさびた金具の口でくいしめた革鞄の中から、紫の袖が一枚。……

たもと 袂たもとが中に、袖口をすんなり、白羽二重の裏が生々いきいきと、女の膚はだを包んだようで、被きた人がらも思われる、裏が通つて、揚羽あげはの蝶の紋がちらちらと羽を動かすように見えました。」

小村さんと私とは、じつと見合っていたままの互の唇がぶるぶ

ると震えたのである。

七

——実はこの時から数えて前々年の秋、おなじ小村さんと、

(連つれがもう一人あつた。)三人連で、軽井沢、碓氷うすいのもみじを見

た汽車うちの中に、まさしく間違まちがうまい、これに就いた事実があつて、

私は、不束ふつつかながら、はじめ、淑女画報しゆくふに、「革鞄かばんの怪。」後に

「片袖。」と改題して、小集せうしゆの中に編うんだ一篇を草くした事がある。

確たしかに紫の袖の紋も、揚羽よううの蝶ちょうと覚おぼえている。高島田たかしまに花はな 笄がいはら

の、盛装した嫁入姿よめいりの窈ようち窕ようたる淑女が、その嫁御寮よめごりやうに似もつ

かぬ、卑しげな慥けんのある女親まじりに、七八人の附添とともに、深谷ふかや駅から同じ室に乗組んで、御寮はちようど私たちの真向うの席に就いた。まさに嫁がんとする娘の、嬉しさと、恥らいと、心こころころやり遣おそれと、恐怖と、笑えみと、涙とは、そのまま膝に手を重ねて、つむりを重たげに、ただ肩を細く、さしうつむいた黒髪に包んで、顔も上げない。まことにしとやかな佳人であつた。

この片袖が、隣席にさし置かれた、他の大革靴の口に挟まったのである。……失礼ながらその革靴は、ここに藤助が饒舌しゃべるのと、ほぼ大差のないものであつた。

が、持ぬしは、意気沈んで、髻ひげ、髪もぶしようにのび、面おもては憔悴しょうすいはしていたが、素純にして、しかも謹厳なる人物であつた。

汽車の進行中に、この出来事が発見された時、附添の騒ぎ方は……無理もないが、思わぬ麓そそろうであろう、失策した人物に対して、
 傍はたの見る目は寧ろ氣の毒なほどであった。

一も二もない、したたかに詫びて、その革靴の口を開くので、事は決着するに相違あるまい。

我も人も、しかあるべく信じた。

しかるにもかかわらず、その人物は、人々が騒いで掛けた革靴の手の中から、すかりと握にぎりこぶし拳こぶしの手を抜くと斉ひとしく、列車の内へすつくと立つて、日に焼けた面は瓦つらかわらの黄昏たそがるるごとく色を変えながら、決然たる態度で、同室の御婦人、紳士の方々、と室内に向つて、掠かすれごえ声こゑして言った。……これなる窈窕たる淑女――

私もここにその人物の言つた言を、そのまま引用したのであるが（ことば）
窈窕たる淑女のはれ着の袖を侵したおかのは偶然の麴である。はじめは旅行案内を掴つかみだ出して、それを投込んで錠を下した時に、うつかり挟んだものと思われる。が、それを心着いた時は——と云つて垂たらたらと額に流るる汗を拭ぬぐつて——ただ一瞬間に千万無量、万劫ばんごうの煩惱を起した。いかに思い、いかに想つても、この窈窕たる淑女は、正まさしく他ひとに嫁せらるるのである……ばかりでない、次か、あるいはその次の停車場ステーションにて下車なさるとともにたちまち令夫人とならるる、その片袖である。自分は生命を掛けて恋した、生命を掛くるのみか、罪はまさに死である、死すともこの革靴の片袖はあえて離すまいと思う。思い切つて鍵を棄てました。

わたくし

私はこの窓から、遙はるかに北の天に、雪を銀欄のごとく刺繡ししゅうした、

あの遠山えんざんの頂を望んで、ほとんど無辺際に投げたのです、と言いつた。

——汽車は赤城山あかぎさんをその翼たつみの窓に望んで、広漠たる原野の末

を貫ぬいていたのであつた。——

渠かれは電信技師である。立野竜三郎たつのりゆうざぶろうと自ら名告なのつた。渠かれはも

とより両親も何もない、最愛の児こを失い、最愛の妻を失つて、世

を果敢はかなむの余り、その妻と子の白骨と、ともに、失うべからざる

ものの一式、余さずこの古革靴に納めた、むしろ我が孤みひとつの煢然けいぜん

たる影をも納めて、野に山に棄つるがごとく、絶所、僻境へききようを

望んで飛驒山中の電信局へ唯今赴任する途中である。すでに我身

ながら葬り去つた身は、ここに片袖とともに蘇よみがえ生がえつた。蘇生ると同時に、罪は死である。否いや、死はなお容易たやすい、天とがの咎とが、地せめの責せめ、人の制規おきて、いかなる制裁といえども、甘んじて覚悟して相受ける。各位が、我わがために刑を撰んで、その最も酷なのは、磔はりつけでない、獄門でない、牛裂うしぎきの極刑でもない。この片袖を挟んだ古革靴を自分ぶんにぶら下げさせて、嫁御寮のあとに犬のごとく従わせて、そのまま今こんにち日の婿君の脚下ひざまずに拝し跪かせらるる事である。諾よし、その嚴罰こうむを蒙りましょう、断じて自分はこの革靴を開いて片袖は返さぬのである。ただ、天地神明に誓うのは、貴女きじよの淑徳と貞潔である。自分は生れてより今に及んで、その姿を視みたのはわずかに今より前ぜん、約三十分に過ぎない、……包ましくさしうつつむかれた淑

女は、申すまでもなく、自分に向つて瞳をも動かされなかつた事を保証する、——謹んで断罪を待ちます……各位。

とつとつ
 唸々として、しかも沈着に、純真に、縷々この意味の数千言を語つたのが、轟々たる汽車の中に、あたかも雷鳴を凌ぐ、深刻なる独白のごとく私たちの耳に響いた。

附添の数多あまたの男女は、あるいは怒り、あるいは罵りのし、あるいは呆れ、あるいは呪詛のろつた。が、狼狽ろうばいしたのは一様である。車外には御寮むかえを迎むかひの人数にんずが満ちて、汽車は高崎に留まろうとしたのであるから……

既に死灰のごとく席に復して瞑目めいもくした技師がその時再び立つた。ここに手段があります、天が命ずるにあらず、地が教うるに

あらず、人の知れるにあらず、ただ何ものの考慮とも分らない手段である……すなわち小刀ナイフをもつて革靴を切開く事なのです。……私わたくしは拒みません。刀ものは持合せました、と云つて、鞞さやをパチンと抜いて渡したのを、あせつて震える手に取つて、慳けんそう相な女親が革靴の口を切裂こうとして、屹きつと猜疑さいぎの瞳を技師に向くると同時に、大革靴を、革靴のまま提げて、そのまま下車しようとした時であつた。

「いいえ！」

と一言ひとこと、その窈窕たる淑女は、袖つけをひしと取つて、びりびりひつきと引切つた。緋ひの長襦袢ながじゆばんが※と燃える、片身を火に焼いたように衝つと汽車を出たその姿は、かえつて露の滴のごとく、おめ

き集つどう群集は黒くろけむり煙むりに似たのである。

技師は真俯まうつむ向けに、革靴の紫の袖に伏した。

乗合は喝かつさい采さいして、万歳の声どっが哄どっと起つた。

汽車の進むがままに、私たちは窓から視みた。人数に抱上げらるるようになつて、やや乱れた黒髪に、雪なす小手かぎを翳かぎして此方こなたを見送つた半身くれないの紅べには、美しき血をもつて描えいたる煉獄れんごくの女精めいせいであつた。

碓氷の秋は寒かつた。

藤助は語り継いだ。

「姉^{ねえ}さんが、そうすると……驚いたように、

（あれ、それを見ちや不可^{いけ}ません。）

（やあ、つい麿^{そろう}を。）

と、何事も御意のまま、頭をすくめて恐縮をしますとね、低^{こごえ}声
 になつて気の毒そうに、

（でも、あの、そういう私が、密^{そつ}と出して、見たいんでございま
 す。）

（そこで鍵が御入用。）

（ええ、ですけど、人様のものを、お許しも受けないで、内証で
 見ては悪うございましょうねえ。）

(何、開けたらまた閉めておきやあ、何でもありやしませんや。)

とその容子ようすだもの、お前さん、何だつて構やしません。——お

手軽様に言つて退のけると、口に袖をあてながら、うっかり釣込まれたような様子でね、また前あしとさき後を視みましたつけ。

(では、ちよつと今のうち鑄掛屋さん、あなたお職柄で鍵こしらを拵さるより前さきに、手で開けるわけには参りませんの。)

ぶるぶるぶる……私わつしあ、頭くちばしと嘴くちばしを一所に振つた。旦那めえの前だが、

……指を曲げて、口を押えて、瞼まぶたへ指の環を当がつて、もう一度頭を掉ふつた。それ、鍵の手は、内証うちじやうで遣やつても、たちまちお目玉。

……不可いけねえてんだ、お前さん。

(御法度ごはつとだ。)

と重く持たせて、

(ではござれども、姉さんの事だ、遣らかしやしよう、大達引^{おおたてひき}。

奥様のお記念^{かたみ}だか、何だか知らねえ。成程こいつあ、そのな、へ

ッヘッ、誰方^{どなた}かに向つての姉さんの心意気では……お邪魔になる

でございましょうよ。奥歯にものが挟まったつて譬^{たとえ}はこれだ。す

つぱり、打開^{ぶちま}けてお出しなせえまし。)

(いえ、あの、開けて出すよりか、私が中へ入りたい。)

と仇気^{あどけ}なく莞爾^{にっこり}すら、チエーしたもんだ。

(御串戯^{ごじようだん}で、中へ入ると、恐怖^{おっかね}え、その亡くなつた奥さんの骨^{こつ}

があるんじやありませんかい。)

(もう、私は、あの、奥さまの、その骨^{ほね}になりたいの。)

ああ、その骨になりたいか、いや、その骨でこっちは海月くらげだ、
ぐにやりとなつた。

(御勝手だ。)

(あれ、そのかわりに奥さまが、活きた私におんなさる、容きりよ
色うは、たとえこんなでも。)

(御勝手だ。いや、御法度だね。)

(そんな事を言わないで、後生ですから、鑄掛屋さん。)

(開けますよ。だがね……)

と、一つ勿もつたい体で、

(こいつあ口伝くでんだ、見ちや不可いけねえ、目を瞑つぶつていておくんなさい
。)

(はい。)

(もつと。)

(はい。)

(不可^{いけね}え不可^{いけね}え、薄目を開けてら。)

(まあ、では後を向きますわ。)

(引^{ひき}しまつて、ふつくりと柔^{やわら}かで、ああ、堪^{たま}らねえ腰附だ。)

(可^{いや}厭……知りませんよ。)

と向直ると、串^{じょうだん} 戯の中にしんみりと、

(あれ、ちよつと待つて下さいまし。いま目をふさいで考えますと、お許^{ゆるし}がないのに錠前を開けるのは、どうも心が済みません。

神様、仏様に、誓^{せいもん}文して、悪い心でなくつても、よくない事だ

と存じます。)

わつしまじめ
私も真面目にうなずきました。

(でも、合鍵は拵えて下さいまし、大事にそれを持っていて、：
出来るだけ我慢はしますけれども、どうしても開けたくつてな
らなくなりました時に、いのち生命にかえても、開けて見とうございま
すから。)

晩の泊はどこだつて聞きますから、向うの峰の日脚を仰向あおむいて、
下の温泉だと云いますとね、双葉屋の女中だと、ここで姉さんが
名を言つて、お世話しましょうと、きつい発奮はずみさ。

御旅館などは勿体ねえ、こちらら式がと木賃がると、今頃はか
らあきで、ひとけ人氣がなくなつて寂しいくらい。でも、お一方——おと一昨

日とから、上州高崎の方だそうだけれど、東京にも少すくかろう、品のいい美しい、お嬢さんだか、夫おく人だか、少わかい方がお一方……」

「お一方？」

と、うっかり訊きいて私は膝を堅うした。——小村さんも同じ思いは疑いない。——あの時、その窈窕たる御寮が、汽車を棄てたのは、かしこで、その高崎であつた。

「さようで。——お一方御逗留ごとうりゆう、おさみしそうなその方にも、いまの立山が聞かせたいと、何となくそのお一方が、もつての外じつ気になるようで、妙に眉のあたりを暗くしましたつけ、熟じつと日じつのなかがげる山を視なめたが、

(ああ。鑄掛屋さん。)

と慌^{あわただ}しい。……皆まで聞かずに飲込んだ、旦那様帰り引と……
 ここらは鶉^うだてね、天幕^{テント}の逢目^{あいめ}をひよこりと出た。もとの山^{やまつば}
 端^なへ引退^{ひきさが}り、さらば一服^{つかまつ}仕ろう……つぎ置の茶の中には、松
 の落葉^{もみじ}と朱葉^{もみじ}が一枚。……」

(ああ、腹が減った……)

と色気のない声を出して、どかりと椅子に掛けたのは、焦茶色
 の洋服で、身の緊^{しま}った、骨格^{ちゆうぶる}のいい、中^{ちゆうぶる}古^{ちゆうぶる}の軍人^{ちゆうぶる}といった技
 師の先生だ。——言うまでもなく、立野竜三郎^{たけのりゆう}は渠^{かれ}である——

(減った、減った、無茶に減った。)

と、いきなり卓^{テエブル}子^{テエブル}の上の風呂敷包みを解くと、中が古風にも

竹の子弁当。……御存じはございますまい、三組みつぐみの食籠わりごで、畳
むと入子いれこに重かさなるやつでね。案ずるまでもありませんや、お道姉さ
んが心入れのお手料理か何かを、旅館から運ぶんだね。

(うまい、ああ旨うまい、この竹輪は骨がなくて難有ありがたい。)

余り旨そうなので、こっちは里心が着きました。建場たてば々々で飲や
酒さけりますから、滅多に持出した事のない仕込かたげの片餠あぶらげ、油揚あぶらげの煮に
染しめに沢庵さわあじというのを、もくもくと頬張りはじめた。

お道さんが手拭を畳んでちよつと帯に挟さんだ、茶汲ちやくみ女おんなとい
う姿で、湯呑を片手に、半身で立つて私わっしの方を視みましたがね。

(旦那様だんなさん……あの、鑄掛屋ちゅうかけさんが、お弁当を使つかいますので、お

茶を御馳走ごちそういたしました。……お盆がなくて手で失礼でござい
ます。）

と湯気の上る処を、卓子の上へ置くんでございますがね、加賀
の赤絵の金々たるものなれども、ねえ、湯呑は嬉しい心意気だ。

（何、鑄掛屋。）

と、何だか、氣を打つたように言つて、先生、扁平ひらたい肩で捻ね
て、私わつしの方を覗のぞきましたが、

（やあ、御馳走はありますか。）

とかすれ笑いをしなさるんだ。

（へッ、へッ。）と、先はお役人様でがさ、お世辞笑わらいをしたばか
りで、こちらも肩で捻つら向く面だ、道陸神どうろくじんの首を着換つかけえたとい

形だてね。

(旨い。)

姉さんが嬉しそうな顔をしながら、

(あの、電信の故障は、直りましてございますか。)

(うむ、取払ったよ。)

と頬張った含^{ふくみこえ}声で、

(思ったより余程さきだった。)

ははあ、電線に故障があつて、障^{さわ}るもの見当が着いた処から、

先生、山めぐりで見廻つたんだ。道理こそ、いまし方天幕へ戻つ

て来た時に、段々塗の旗竿^{はたざお}を、北極探検の浦島といった形で持

つていて、かたりと立掛けて入^{へえ}んなすつた。

(どうかなくなってしまったの。)

(変なもの……何、くだらないものが、線の途中に引ひっ搦からつて

……)

カラリと箸はしを投げる音が響いた。

(うむ、来た。……トーン、トーン……可よし。)

お道さんの声で、

(旦那様、何ぞ御心配な事ではございませんか。)

一口がぶりと茶を飲んで、

(詰つまらぬ事を……他所よそへ来た電報に、一々気を揉もんでいて堪たまるも

んですか。)

(でも、先刻さつき、この電信が参りました時、何ですか、お顔の色が

……)

(……故障のためですよ、青天井の煤すすはき払は下さりませんからな、は、は。)

と笑った。

坂をすすると這はい上あがる、蝙蝠こうもりか、穴熊なりのようなのが、衝つと

近く来ると、海軍帽を被かぶつたが、形なりは郵便の配達夫——高等二年ぐらいな可愛い顔の少年が、ちゃんと恭うやうやしく礼をした。

(ああ、ちょうどいま繋つなががつた。)

(どうした故障でございますか。)

と切口上で、さも心配をしたらしい。たのもしいじゃあござい
ませんか。

(網掛場の先の処だ、烏を蛇が捲いたなりで、電線に引搦あみかけばつて死んでいたんだよ。烏が引啣ひきくわえて飛ぼうとしたんだろう：
：可なりおおき大な重い蛇だから、飛切れないで鋼線はりがねに留った処を、
電流で殺されたんだ。ぶら下った奴は、下から波を打って鎌首を
もたげたなりに、黒焦くろこげになつていた——君、急いでくれ給え、
約四時間延着だ。)

(はっ。)
と云つて行くのを、

(ああ、時さん。)

とお道さんは沈んで呼んだ。が、寂しい笑顔を向け直して、
(配達さん——どこへ……)と訊きいた。

少年が正しく立停たちとどまって、畳んだ用紙を真まっすぐに視みて、

(狼温泉——双葉館方……村上縫子……)

(そしてどちらから。)

(ヤホ次郎——行って来ます。)

(そんな事を聞くもんじゃあない。)

(ああ、済みませんでした。)

(何、構わないようなもんじゃあるがね——どっこいしょ。)

がた、がたんと音がする。先生、もう一つの卓テエブル子を引立って、猪とつくと取組むように勢いきおいよく持つて出ると、お道さんはわけも知らな
いなりに、椅子を取って手伝いながら、

(どう遊ばすの。)

と云ううちに、一段下りた草原くさつばらへ据えたんでございますがね、——わけも知らずに手伝った、お道さんの心持を、あとで思うと涙が出ます。」

と肩もげつそりと、藤助は沈んで言った。……

「で、何でございますよ——どう遊ばすのかと、お道さんが言うと、心待、この日暮にはここに客があるかも知れんと、先生が言いますわ。あれ、それじゃこんな野天でなく、と、言おうじゃあございせんか。」

(いや、中で間違まちがいがあるとならんで。)

(え、間違とおっしゃって。)

とお道さんが、ひったり寄った。

(私は、)

と先生は、肘ひじで口の端はたを横撫よこなでして、

(髯ひげもまずいが、言う事がまずくて不可いかんです。間違じやあない、故障です、素人は気なしだからして、あんな狭い天幕の中で、器械にでも障つて、また故障にでもなると不可いかんだ。決して心配な事ではないのです、——さあ飯だ、飯だ。)

と今度はなぜか、箸を着けずに弁当をしまいかけて、……親方の手前もある、客に電報が来た様子では、また和女おまえの手も要るだろう、余り遅くならないうちにと、懇ねんごろに言うのと、

(はい、はい。)

と柔順すなおに返事する。片手間に、継掛けの紺足袋と、寝衣ねまきに重ね

る浴衣のような洗濯ものを一包、弁当をぶら下げて、素足に藁わら草履うり、ここからは、山家で——悄悄しおしお々と天幕を出た姿に、もう山の影が薄暗く隈を取って映りました。

(今、何時だろう。)

と天幕口へ出て、先生が後姿を呼びましたね。

(……四時半頃にもなりましょうか。)

(時計が止とつたよ——気をつけておいで。)

とおおきと大な懐中時計と、旗竿の影を、すっくり立って、片頬かたほ夕日を浴びながら、熟じつと落着いて視ながめていなさる。……落着いて視みちやあいなすつたが、先生少々どうかなさりやしねえのかと思つたのは、こう変に山が寂しくなつて、通魔とおりまでもしそうな、静寂しじまの鐘

の唄の塩梅あんばい。どことなくドン——と響いて天狗倒てんぐだおしの木精こだまと一所に、天幕うちの中じゃあ、局うちの掛時計がコトリコトリと鳴りましたよ。

お地藏様が一体、もし、この梟ヶ嶽の頭を肩へ下り口に立つてござる。——私わっしどもは、どうかすると一日いちんちの中にや人間の数より多くお目に掛かかる、至極可懐なつかしいお方だが……後で分りました。

この丘は、むかし、小さな山寺があつたあとだそうで、そう言や草の中に、崩れた石の段々が蔦つたと一所に、真下こみちの径へ、山懐へまとつています。その下の径というのが、温泉宿入りの本街道だね。

お道さんが、帰りがけに、その地藏様を拝みました。石の袈裟けさの落葉を払って、白い手を、じつと合せて、しばらくして、

(また、お目にかかります。)

と顔を上げて、

(後程に——)

もう先生は天幕へ入った——で、私わつしにしみじみとした調子で云った時の面影が忘れられねえ………睫毛まつげにたまつて、涙が一杯。

……風が冷く、山はこれから、湿ぬっぽい。

秋の日は釣瓶つるべ落おしだ、お前さん、もうやがて初冬はつふゆとは言い条、

別わかして山家だ。静しずかに大沼の真中まんなかへ石を投げたように、山際へ日

暮の波が輪わになつて颯さつと広がる中で、この藤助と云う奴が、何を

したと思おぼしめ召めす。

三尺をしめ直す、脚絆ほこりの埃はたを払い、荷にづなを天秤てんびんに掛け

たり、はずしたり。……三味線の糸をゆるめたり、袋に入れたり
 ……さてまた袋を結んだり。

そこへ……いまお道さんが下りました、草にきれぎれの石段を、
 攀よじ攀よじ、ずツと上あがつて来た、一個、年ひと紀としの少わかい紳だんな士ながあります。

山の陰気な影をうけて、凄すこいような色の白いのが、黒の中折帽
 を廂ひさしさが下りりに、洋ステッキ杖も持たず腕を組んだ、背広でオオバアコ
 オトというのが、色がまた妙に白茶けて、うそ寂やしい。瘡やせて肩
 の立った中脊でね。これが地蔵様の前へ来て、すつくりと立った
 と思うと、頭かみ髪みの伸のびた技師の先生が、ずかずかと天幕を出まし
 た。

それ、卓テエブル子を中に、控えて、開いて、屹きつと向向合合つたと思思召召せ。

わか だんな
少い紳士が慇懃に、

(失礼ですが、立野竜三郎氏でいらつしやいますか。)

(さよう、お尋ねを蒙りました竜三郎、私であります。)

(申しおくれました、私は村上八百次郎と申すものです。はじめ
てお目にかかります……唯今、名刺を。)

(いや。)

と先生、卓子の上へ両手をずかと支いて、

(三年前から、御尊名は、片時といえども相忘れません、出過ぎ
ましたが、ほぼ、御訪問に預りました御用向も存じております

。)

と、少いのが少し屹となつて、

(用向を御存じですか?)

(まず、お掛け下さい。)

と先生は、ドカリと野天の椅子に掛けた。

何となく気色ばんだ双方の意気込が、殺気を帯びて四辺あたりを払った。この体を視た私わっしだ。むかし物語によくあります、峰の堂、山の祠ほこらで、怪しく凄すこい神たちが、神つどいにつどわせたという場所へ、破戒坊主が、はい蹲つくばったという体で、可恐おそろし可恐し、地藏様の前に踞しゃがんで、こう、伏拝む形なりをして、密そつと視たんで。

先生は更あらためて、両手を卓子につき直して、

「——受信人、……狼温泉二葉屋方、村上縫子、発信人は尊名、貴姓であります。」

コンニチゴゴツク。ヨウイ（今日午後着く。用意）」

と聞きも済まさず、若い紳士は、斜ななめに衝つと開いて、身構えて、

（何、私信を見た上、用件を御承知になりましたな。）

「偏ひとえに申訳をいたします。電報を扱います節、文字もんじは拾いますが、

文字は普通……拾いますが、職務の徳義として、文字は綴りましても、用件は記憶しません。しかるところ、唯今申上げました

（コンニチゴゴツク、ヨウイ）で、不意に故障が起りました、幾度も接続を試みますうちに、うかと記憶に残ったのです。のち四時間、やっと電線が恢かい復ふくして（ヨキカ）と受信しましたのです。

謹んで謝罪いたします。」

と面おもてを上げ、乾からびた咳せきして、

「すなわち、受信人、狼温泉、二葉屋方、村上縫子。発信人、尊名、貴姓、すなわち、（今日午後着く。用意よきか。）」

（分りました。）

と静しずかに言う時、ふと見返った目が、私わつしに向いた、と一所にな：

…先生の眼まなこも光りました。

おびおび怯えて立つたね、悚然ぞつとした。

荷を担いで、ひようろ、ひよろ。

ようやく石段の中ほどで、吻ほっと息をして立つた処が、薄暮うすくれあい合

の山の凄すこさ。……天秤てんべんかついだ己うぬが形なりが、何でございますかね、

天狗様てんぐさまの下男しもやうが清水しみずを汲くみみに山一つ彼方あなたへといった体ていで、我われなが

ら、余り世間離れがした心細さに、

(ほつ、)

と云つたが、声も、ふやける。肩をかえて性根だめしに、そこで一つ……

(鑄掛——錠前の直し。)

何と——旦那。」

九

「……時に——雪の松たいまつ明が二把わ。前後あとさきに次第に高くなつて、白い鼻ふくろ、化鼻、蔦つた葛かずらが鳥の毛に見えます、その石段を攀よじるのは、まるで幻影まぼろしの女体が捧げて、頂の松、電信柱へ、竜燈が

上るあがんでございました。

上り果てた時分には、もう降っているのが止やみましたつけ。根雪に残るのじゃあございません、ほんの前触れで、一きよめ白くしましたので、ぼつとほの白く、薄鼠に、梟の頂が暗やみ夜に浮いて見えました。

苦しい時ばかりじゃあねえ。こんな時も神頼み、で、私わつしは崖がけぶ縁ちをひよいと横へ切れて、のしこと地藏様の背後うしろに蹲しゃがみ込んでのぞ覗いたんで。石像のお袈裟けさの前へは、真ま白しろに吹掛けましたが、うしろは苔こけのお法衣ころものまま真ま黒くろで、お顔が青うございましたよ。大方いまの雪のために、先生も、客人も、天幕ひきこもに引籠ひきこもったんでございましょう。卓テエブル子こばかりで影もない。野天のその卓子が、

雪で、それ大理石。——立派やかなお座敷にも似合わねえ、安火鉢の曲ゆがんだやつが転がるように出ていました。

その火鉢へ、二人が炬たいまつ火をさし込みましたわ。一ふさり臥ふさつて、柱のように根を持つて、赫かつと燃えます。その灯あかりで、早や出端でばなに立つて出かかった先生方、左右の形は、天幕がそのままの巖がんせ石きで、言わねえ事じゃあねえ、青くまた朱に刻みつけた、怪しい山神さんじんに、そつくりだね。

ツツとあとへ引いて、若い紳士だんなが、卓子に、さきの席を取つて、高島田の天人を、

(縫子さん。)

と呼びました。

御婦人が、髪ふきなの流ながしを取った、気高い顔は、松明の火いに活

きいきき
々きいきと、その手拭てぬぐいで、お召めいのコオトの雪ゆきを払はつていなすつたけ、

揺ゆれて山茶花さざんかが散ちるようだ。

(立野たちのさんに御挨拶ごあいさつをなさい。)

(唯今ただいま。)

と静しずかに言いつて、例れいの背後せなかに掛かけた竹たけの子笠こがさを、紐ひもを解といて、取

りましたが、吹ふ添そつて、風かぜはあるのに、気きで鎮しずめたかして、その

笠がさが動うきもしません。

卓子たくしの脚あしに、お道みちさんのと重かさねて置おいて、

(あなた
貴方あなた——御機嫌ごきげんよう。)

(は。)

と先生は一言云つたきり、顔も上げないで、めり込むように深く卓子の端についた太い腕が震えたが、それより深いのは、若旦那の方の年紀としとも言わない額に刻んだ幾筋かの皺しわで、短く一分刈かに見える頭つぶりは、坊さんのようで、福々しく耳の押立おったつて大いおおきのに、引締つた口が窪んで、大きく見えるまで、げっそりと頬の肉が落ちてゐる。

(夫人。おくさん)

と先生はうつむいたままで、

(再び、御機嫌の顔を拝することを得わたまして、私一代の本懐です。生れつきの口不調法が、かく眼まのあたり前に、貴方のお姿に対しましては、何も申上げる言ことばを覚えませぬ、ただしかし、唯今。)

と、よろめいて立って、椅子の手に縋すがりました。

(唯今、一言御挨拶を申上げます。)

と天幕に入ると、提げて出た、卓子を引抱ひっかかえたようなものではない、千仞じんの重さに堪えない体ていに、大革鞆を持った胸が、吐と呼い吸きを浪に吐つく。

それと見ると、簞みのを絞しぼって棄すてました、お道さんが手を添そえながら、顔を見ながら、搦からんで、纏もつれて、うっかりしたように手伝う姿は、かえって、あの、紫の片袖に魂が入って、革鞆を抜けたように見えました。

ずしりと、卓子の上に置くと、……先生は一足退さがって、起立の形なりで、

(もはや、お二方に対しましては、……御夫婦に向いましては、立つて身を支えるにも堪えませんが、一刻も早くこの人畜にんちくの行おこな為いに対する、御制裁を待ちます。即時に御処分のほどを願います。)

若旦那が、

(よろしいか。)

とちと甘いほどな、この場合優しい声で、御夫人に言いました。

(はい。)

と、若奥様は潔い。

若旦那はまつすぐに立直つて、

(立野さん。)

(……………)

(では、御要求をいたします。)

(謹んで承ります、一点といえども相背きはいたしますまい。)

(そこに、卓子の上に横にお置きなさいました、革鞆を、縦にまつすぐにお直し下さい。)

(承知いたしました——いやいや罪人の手伝をしては、お道さん、^{けが}汚れるぞ。)

と手伝を払って、しっかとその処へ据直す。

(立野さん。貴下^{あなた}は革鞆の全形と折^{おり}重^{かさな}って、その容量を外れ

ない範囲内にお立ち下さい。縫子が私の妻として、婚礼の日の途中、汽車の中で。)

と云う声が少し震えました。

（貴下に、その紫の袖を許しました、その責せめに任ずるために、ここに短銃ピストルを所持しております、——その短銃をもってここに居て革鞆を打ちます。弾丸をもって錠前を射いき切るので。錠前を射うち切つて、その片袖を——同棲三年間——まだ純真なる処女の身にして、私のために取返すんです。袖が返るとともに、更あらためて結婚します。夫婦になります。が、勿論しかし、それが夫婦のもの、身の終結になるかも分りません。なぜと云うに、革鞆と同時に、兇器をもって貴下のお身体からだに向うのです。万一お生命いのちを縮めるとなれば、私はその罪を負わねばならないのですから。それは勿論覚悟の前です……お察し下さい、これはほとんど私が生命を忘れ、

世間を忘れ、甚しきは一人の親をも忘れるまで、寝食を廃しまし
 て、熟慮反省を重ねた上の決意なのです。はじめは貴方が、当時
 汽車の窓から赤城山の絶頂に向つて御投棄てになつたという、革
 鞆の鍵を、何とぞして、拾い戻して、その鍵を持ちながらお目に
 かかつて、貴下の手から錠を解いて、縫のその袖を返して頂きた
 いと存じ、およそ半年、百日に亙りまして、狂と言われ、痴と言
 われ、愚と言われ、嫉妬と言われ、じんすけと嘲けられつつも、
 多勢の人数を狩集めて、あの辺の汽車の沿道一帯を、粟、蕎麦、
 稻を買求めて、草に刈り、芥にむしり、甚しきは古塚の横穴を発
 いてまで、捜させました。流星のごとく天際に消えたのでしよう、
 一点似た釘も見当りません。——唯今……要求しますのは、その

後の決心である事を諒りようとして下さいまし。縫ぬいもよくこの意を体して、三年の間、昼夜を分かず、的を射る修鍊をいたしました。——最初、的をつくります時、縫がものさしを取って、革鞆の寸法を的に切りましたが、ここで実物を拝見しますと、その大さおおきと言い、錠前のある位置と言い、ほとんど寸分の違いもありません。……不思議です。……特に奇蹟と存じますのは、——家の地続しききを劃しきつて、的場を建てましたのですが、土地の様子、景色、一本の松の形、地藏のあるまで。）

——私わっしはすくんだね——

（夢のようによく似ています。……多分、皆お互に、こうした運命だと存じます。……短銃ピストルは特に外国に注文して、英国製の最

優良なものを取寄せました。連発ですが、弾丸はただ一つしか籠^こめてありません、きつと仕損じますまい。しかし、御覚悟を下さいまし。——もつとも革靴^{かさな}と重^{かさな}ってお立ち下さいますのに、その間隔は、五間^{けん}、十間、あるいは百間、三百間、貴下^{あなた}の、お心に任せます。要はただ、着弾距離をお離れになりません事です。)

(一歩もここを動きません。)

先生は、拱^{こまぬ}いた腕を解いて言いましたぜ。「

——そうだろうと、私たちも思っただのである。

「堪たまらねえやね。お前さん。

私わつしあ猿えてんぼ坊ぼのように、ちよろりと影うねを畝うねつて這はい出して、そこに

震ふるえて立たつている、お道みち姉ねえさんの手に合あ鍵かぎを押おつけた。早く早く、
と口くちじゃあ言いわねえが、袖そでを突ついた。

——若わ奥おく様さまの手てが、もう懐ふところ中ちゆうに入いつた時ときでござごいますよ。

(御免遊ごめんあそばせ。)

と縫すりつくように、伸の上のつて、お道みちさんが鍵かぎを合あせ合あせするの
が、あせるから、ツルツルと二三度すべ迂まりました。

(ああ、ちよつと。)

と若わ奥おく様さまが、手てでおささえて、

(どうぞ……そればかりは。)

と清すずしく言います。この手二つが触ったものを、錠前の奴、がんととして、雪になつても消えなんだ。

舌の硬こわばつたような先生が、

(飛んでもない事——お道さん。)

(いいえ、構いません。)

と若旦那はきつぱりと、

(飛んでもない事ではありません。それが当然なのです。立野さん。貴下あなたが御自分でなくつても、貴下あなたが許して、錠前をさえお開き下さるなら——方法は扱えらびません。短銃ピストルなんぞ何になりましょう、私はそれで満足します。)

(旦那様。)

と精一杯で、お道さんが、押留められた一つの手を、それなり先生の袖に縋つて、無量の思おもいの目を凝らした。

(はあ、)

と落込むような大息して、先生の胸が崩れようとしますとな。

(貴方、……あの鍵が返りましたか。……優しい、お道さん、美しい、姉ねえさん、……お優しい、お美しい姉さんに、貴方はもうお心が移りましたか。)

と云つて、若奥様が熟じっと視みました。

先生が蒼くなつて、両手でお道さんを押除おしのけながら、

(これは余所よその娘です、あわれな孤みなしご児です。)

とあとが消えた。

(決行なさい、縫子。)

(……………)

(打て、お打ちなさい。)

(唯今。)

と肩を軽く斜めに落すと、コオトが、すつと脱げたんです。煽あおりもせぬのに気が立って、颯さつと火の上る松明たいまつより、紅くれないに燃立つばかり、緋ひの紋縮緬もんぢりめんの長襦袢ながじゆばんが半身に流れました。……袖を切ったと言う三年前ぜんぜんの婚礼の日の曠衣裳はれいしやうを、そのまま、一方紫の袖の紋の揚羽の蝶は、革鞆に留まった友を慕って、火先にひらひらと揺れました。

若奥様が片膝ついて、その燃ゆる火の袖に、キラリと光る短ピスト

銃ルを構えると、先生は、両方の膝に手を垂れて、目を瞑つむつて立ちました。

(お身代りに私が。)

とお道さんが、その前に立塞たちふさがった。

「あ、危い、あなた。」

と若旦那が声を絞った。

若奥様は折敷いたままで、

(不可いけません——お道さん。)

(いいえ、本望でございます。)

(私が肯ききません。)

と若奥様が頭かぶりを掉ふります。

(貴方が、お肯き遊ばさねば、旦那様をお願い申上げます。こんな山家の女でも、心にかわりはござんせん、願ねがいを叶かなえて下さいまし。お情なさけはうけませんでも、色も恋も存じております。もみじを御覧なさいまし、つれない霜にも血を染めます。私はただ活いきておりますより、旦那さんのかわりに死にたいのです。その方が嬉しいのです。こんな事があるうと思つて、もう家を出ます時、なくなつた母親の記念かたみの裾模様を着て参りました。……手織木綿に前まえ垂たれした、それならば身分相応ですから、人様の前に出られまます。時おくれの古い紋もん着つき、襦袢も帯もうつりません、あられないなりをして、恋の仇かたきの奥様と、並んでここへ参りました。ふびんと思つて下さいまし。ああ女は浅間しい、私にはただ一枚、

母親の記念かたみだけれど、奥様のお姿と、こんなはかないなりをくらべて、思う方の前に出るのは死ぬよりも辛うござんす。それさえ思い切りました。男のために死ぬのです。冥みょう加がに余つて勿体ない。……ただ心がかりなは、私と同じ孤みなしご児ごの、時ちゃん——少年の配達夫——の事ですが、あの児こも先生おもいですから、こうと聞いたら喜びましょう。）

若旦那の目にも、奥様にも、輝く涙が見えました。

先生は胸に大波を打たせながら、半ば串じょうだん戯ごにするように、手を取つて、泣なきわらい笑わらをして、

（これ、馬鹿な、馬鹿な、ふふふ、馬鹿を事を。）

（ええ、馬鹿な女でなくつては、こんなに旦那様の事を思いはし

ません。私は、馬鹿が嬉しゅうございます。）

（弱った。これ、詰らん、そんな。）

（お手間が取れます。）

（さあ、お退き、これ、そっちへ。）

（いいえ、いいえ。）

否々をして、頭をふつて甘える肩を、先生が抱いて退けよう

とするなり、くるりとうしろ向きになって、前髪をひしと胸に当てました。

呼吸を鎮めて、抱いた腕を、ぐいと背中へ捲きましたが、

（お退きと云うに。——やあ、お道さんの御母君、御母堂、お記

念の肉身と、衣類に対して失礼します、御許し下さい……御免。）

と云うと、抱倒して、

(ああれ。)

と震えてもがくのを、しかと片足に踏据ふみすえて、
仁王立におうだちにすつ
くと立った。

(用意は宜よろしい。……縫子よろさん。)

(………)

(………)

(さようなら……)

(……さようなら、貴方。)

日光の御廟おたまやの天井に、墨絵の竜があつて鳴きます、尾の方へ
離れると音はしねえ、頤あごの下の低い処で手を叩くと、コリンと、

高い天井で鳴りますので、案内者は、勝手に泣竜と云うのでござ
 いますが、同じ音で。――

コリンと響いたと思うと、先生の身体からだは左右へふらふらして動
 いたが、不思議な事には倒れません。

なむさんぼう
 南無三宝。

片手づきに、白襟の衣紋えもんを外らして仰向きあおもむになんなすった、若
 奥様の水晶のような咽喉のどへ、口からたらたらと血が流れて、元もつと
 結いが、ぷつりと切れた。

トタンにな、革靴の袖が、するすると抜けて落ちました。

(貴方……短銃ピストルを離しても、もう可ようございますか。)

若旦那ひざまずが跪ひざまずいてその手を吸うと、釣鐘を落したように、軽そう

な手を柔かに、先生の膝に投げて、

(ああ、嬉しい。……立野さん、お道さん、短銃をそちらへ向け
て打つような女とお思いなさいましたか。)

(只今、ただいま立たちどころ処に自殺します。)

と先生の、手をついて言うのをきいて、かぶりを掉ふつて、櫛くしこ

笄うがいも、落ちないで、乱れかかる髪をそのまま莞爾にっこりして、

(いいえ、百万年の後のちに……また、お目にかかります。お二方に、
これだけに思われて、縫は世界中のしあわせです——貴方、お詫わび
は、あの世から……)

最後の言葉でございました。」

「お道さんが銀杏返いちようがえしの針を抜いて、あの、片袖を、死骸の袖に縫つけました。

その間、膝にのせて、胸に抱いて、若旦那が、お縫さんの、柔かに投げた腕かいなを撫で、撫で、

（この、清い、雪のような手を見て下さい。私の偏執と自我と自尊と嫉妬のために、詮せんずるに烈はげしい恋のために、——三年の間、夜よに、日ひに、短銃ピストルを持たせられた、血を絞り、肉を刻み、骨を砂利にするような拷ごうりやく掠らに、よくもこの手が、鉄にも鉛にもなりませんでした。ああ、全く魔のごとき残虐にも、美しいものは滅びません。私は慚愧ざんきします。しかし、貴下あなたと縫子とで、どんなにもお話合のつきまますように、私に三日先立って、縫子をこちら

によこしました、それに、あからさまに名を云つて、わざと電報を打ちました。……貴下あなたを当電信局員と存じましていたした事です。とにかく私の心も、身の果もはて、やがて、お分りになりましたよ。う。）

と、いいいい、地藏様の前へ、男が二人で密そつと昇かつぐと、お道さんが、笠を伏せて、その上に帯を解いて、畳んで枕にさせました。
私わつしも十本の指を、額に堅く組んで頂いて拜んだ。

そこらの木の葉を、やたらに火鉢にくべながら……

（失礼、支度をいたしますから。）

若旦那がするすると松の樹の処ゆへ行きます。

そこで内証で涙を払うのかと偲うと、肩ひとに一ゆす揺り、ゆすぶり

をくれるや否や、切立きつたての崖の下は、剣つるぎを植えた巖いわの底へ、真まつさ逆様かさま。霧の海へ、薄うすぐるく、影が残つて消えませぬ。

——旦那方。

先生を御覧なせえ、いきなりうしろからお道さんの口へ猿さるくつ轡わを嵌はめましたぜ。——一人は放さぬ、一所に死のうと悶もだえたからで。——それをね、天幕テントの中へ抱入れて、電信事務の卓子テエブルに向けて、椅子にのせて、手は結ゆわえずに、腰も胸も兵児帯でぐるぐる巻だ。

(時夫の来るまで……)

そう言つて、石段へずつと行ゆく。

私わつしは下口おりくちまで追掛おっかけたが、どうして可いいか、途方にくれてく

るくる廻った。

お道さんが、さんばら髪に肩を振って、身悶えすると、消えかかった松明が赫と燃えて、あれあれ、女の身の丈に、めらめらと空へ立った。

先生の身体が、影のように帰って来て、いましめを解くと一所に、五体も溶けたようなお道さんを、確と腕に抱きました。

いや何とも……酔った勢いで話しましたが、その人たちの事を思うと、何とも言いようがねえ。

実は、私と云うものは……若奥様には内証だが、その高崎の旦那に、頼まれました、技師の方が可い、とさえと一言云えば、すぐに合鍵を拵えるように、道中お抱えだったので。……何、鍵

までもありやしません。——天幕でお道さんが相談をしました時、寸法を見るふりをして、錠は、はずしておいたんでございますのに——

皆、何とも言いようがねえ、見てござった地藏様にも手のつけようがなかつたに違えねえ。若旦那のお心持も察して上げておくんなせえ。

あくる日^{そばみち}岨道を伝いますと、山から取った水^{みずどよ}樋が、空を走って、水^{みずぐるま}車に^{さつ}颯と^{かか}掛ります、真^{まっか}紅な木の葉が宙を飛んで流れましたつけ、誰の血なんでございましょう。」

(峰の白雪麓^{ふもと}の氷)

今は互に隔てていれど)

あとで、鑄掛屋に立山を聴いた——追善の心である。皆涙を流した……座は通夜のようなであった。

姨捨山の月霜にして、果なき谷の、暗き靄もやの底に、千曲川は水晶の珠数の乱るるごとく流れたのである。

大正九（一九二〇）年十二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十卷」岩波書店

1941（昭和16）年5月20日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、「安達《あだち》ヶ原」「梶《ふくろ》ヶ一嶽《たけ》」は小振りに、「焼《やけ》ヶ嶽」は大振りにつくっています。

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

唄立山心中一曲

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>